

命を守る税金

利尻富士町鴛泊中学校3年

西島 一樹

去年の冬の夜のことだった。テレビでは暴風雪のニュースが流れていた。居間でパソコン作業をしていた父が急におなかが痛いと言い出した。そのうち脂汗が吹き出て、母が、

「明日の朝まで我慢できそう？」

と聞くと

「できない」

と答えて倒れるように布団に入った。時間は深夜十一時、母は病院に電話をして、吹雪の中、母の運転する車で利尻島国保中央病院に向かった。

病院では先生が待機してくれていて、レントゲン撮影やCT検査の結果、状態が良くないことと、翌日からの悪天候では島から出られなくなる可能性があり、早く島を出たほうが良いとの判断になった。

島で急患が出たときは、旭川のドクターヘリや北海道の防災ヘリ、稚内の海上保安庁の船などが来ることになっているが、悪天候や深夜という条件が重なり父の搬送先や搬送手段はなかなか決まらなかったそうだ。

この気象下で、出動できるのは自衛隊のジェット機しかないということになり、千歳空港から出動した自衛隊機が利尻空港に降り立ったのは翌朝のことだった。父は利尻空港から札幌の丘珠空港を経由して救急車で市内の民間の病院に移送された。詳しい検査の結果、大動脈解離という血管の病気だったが、緊急手術の必要はないとされ、そのまま入院して経過観察となった。

父を救うために、大勢の人が動いてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。同時に我が家の出費が気になったが、その心配はいらなかった。

母はまず役場に行って「限度額適用・標準負担額減額認定証」という書類を発行してもらっていた。医療費が高額になる場合、ひと月あたり、一定の上限額を支払えばそれ以上の医療費の負担がなくなるというものらしい。

気になるのは自衛隊機の輸送費用だが、驚くことにこの請求はないそうだ。搬送に付き添って下さった医師の帰りの交通費や宿泊代の請求はあったが、これものちに町から助成された。最初にかかった利尻島国保中央病院は公立の医療機関で、医師も看護師も事務職員もみんな公務員だ。つまり父の急患にかかる費用はほぼすべて税金でまかなわれていたのだった。初めて税金の使われ方を身近に感じ、有り難いと実感した出来事だった。

このことをきっかけに、税金が離島の医療にも大きく使われていることを知った。最果てに住む我々が安心して暮らせるのは、税金という制度あってのことだったのだ。

税金は、誰に、何のために払っているのかがわかりにくい、身近かなところでは、私は買い物に行くたびに消費税を払っている。この何気なく払っている税金がわたしたちの生活や未来を守っていたことになる。

税金は、人の命を守っているのだ。